

カントゥータ

Cantuta

No. 48



コチャバンバ市内の築百年以上経過した日干し煉瓦造の伝統的な住まい(撮影:高橋 慎一郎)

1. ボリビアの伝統技術を生かした土の建築 No.3

~穀倉地帯コチャバンバの住まいと美食~ ………… 高橋慎一郎

2. ベニ・パンド日本人居住地探訪記

(3) サンタ・アナ・デ・アブナ編 …… 佐藤 信壽

3. ボリビア・サンタクルスの秋 ………… 佐藤 信壽

4. 日本人が見たリベラルタ 一その10一 …… 大島 正裕

一般社団法人日本ポリビア協会

ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

1. ボリビアの伝統技術を生かした 土の建築 No.3

一穀倉地帯コチャバンバの 住まいと美食〜 土の空間工房SoBaTo 代表 髙橋 慎一郎

◆はじめに

少し昔の話になる。2001年から2007年の約6年間、日本とボリビアを行き来しながら、学び舎という識字教育などに使う施設2棟と、身障者リハビリセンター建設に使う12000個の日干し煉瓦の生産管理に関ってきた。この3つの建築の仕事を、ボリビアの人たちと一緒に泥まみれになりながら、もくもくと続けていた。その仕事の中で、ボリビアの穀倉地帯と呼ばれるコチャバンバの3地域に住み、アンデス原産の黄色や紫色といった多彩な色彩のジャガイモなどの野菜や、キウィに似た食感のサボテンの実といった日本では見かけない果実を味わった食生活を懐かしく思う。

この号では、生活者としての視点から、 当時、暮らしていた3つの異なる建設方法 で建てられた土の住まいと現地の美味し く恵み豊かな食事について紹介したい。

◆ティキパヤ村の住まいと美食 〜学び舎2棟目にて〜

最初に生活した住まいは、コチャバンバ 県の中心街から北西に位置して、築百年以 上を経過した日干し煉瓦の建物も見かけ るティキパヤ村(Tiquipaya)にあった。 ティキパヤ村へ向かうには、コチャバン バの中心市街地から、国立サンシモン (San Simon)大学の正門枠に風格のある アルゼンチン人の革命家チェ・ゲバラをペンキで描いた壁画をバックにして、Z12という番号のカラフルな色彩の中型バスに乗る。そして、約30分後、ユーカリ並木道を通り抜けると、この村に到着。

この村で生活を送っていたアパートは外壁が淡いクリーム色のペンキに塗られたRCラーメン構造(柱、梁のみ鉄筋コンクリート)の3階建てで、土を焼いたラドゥリーリョ(ladrillo)と呼ぶ焼き煉瓦を壁に積み、左官職人が清楚な白色のイエソ(yeso)と呼ばれる石膏のモルタルを塗っている。床は、光沢のある白い磁器タイルが貼られた清潔感のある部屋を、日々の生活とNGO学び舎づくりの会の仕事の場としていた。部屋の広さは約69.8㎡で、天井高さ約2.3 m、小さなベランダと洗濯スペース付きで、2LKであった。



図1-1 ティキパヤ村のアパートの部屋の平面図

この部屋の北側の木製窓を開ければ、地酒チチャ(chi-cha)注1と果実酒ガラッポ(guarapo)注2が飲める居酒屋が見えた。チチャは酸味があり、ガラッポは甘く、それぞれ美酒であった。その居酒屋からフォルクローレという民族音楽の音楽とほろ酔いで楽しそうな村人の歌声が、アンデスの澄み切った青空に木霊して、土曜日の午後などは部屋で昼寝をしながら、その音楽に酔いしれていたことを思い出す。そうし

た心地良い記憶は、東京で同じ青空を見ているときに郷愁を感じ、日々の疲れを癒してくれることもある。

(注1:トウモロコシから作る地酒、2Lで5BS=約31円、2001年)

(注2:ブドウなど果実から作る酒、2Lで5BS=約31円、2001年)



写真1-1 チチャが飲める居酒屋を知らす赤い暖簾

こうした情緒溢れる村内だが、残念なが らアパートの近所には施工精度の低い日 干し煉瓦の住まいがあった。

アパートの部屋で昼寝をしていると、危険な病気「シャーガス病(chagas)」を引き起こすカメムシの一種のビンチューカ(vinchuca)という虫が、その辺りから飛来してきて、顔にとまっていて、驚くこともあった。「ビンチューカは、土の建物に住む」と、コチャバンバでは言われているが、それは少し乱暴な言い方であろう。現地の建築家の話や実体験から判断すると、日干し煉瓦を作る際にしっかりと整形していないため、煉瓦自身にジャンカと言われる穴があったり、煉瓦同士を結びつける

目地がしっかり充填されていないため、そうした部分にこの虫は生息するのである。 確かに近所の住まいの日干し煉瓦壁は、煉 瓦自体に穴があり、目地も荒々しく積んであり、ビンチューカが生息しやすかったと思う。しかし日干し煉瓦の建物であっても日干し煉瓦を製作の際、土、藁、水を混ぜた泥に石灰や少量のセメントを混ぜて、防虫性や煉瓦の密度や精度を高めたり、目地をしっかり詰めた施工をすれば、ビンチューカが住めない。また、日干し煉瓦の上に石膏、漆喰、土の上塗りといった風に壁を仕上げれば、日干し煉瓦の風化を防ぎ、ビンチューカの生息は防げる。

こうした背景を勘違いして、住まいの壁 を焼き煉瓦にしても、煉瓦と煉瓦を繋ぐ目 地部分がスカスカに積まれていたら、そこ にはビンチューカは生息してしまうので 注意が必要だろう。

さて、食生活の方は、どうしていたかというと、村の中心の広場に面した商店で新鮮な鶏肉を丸々1匹買って、瑞々しいトマトやインゲンと一緒に煮込んだスープなどを料理しながら、自炊をしていた。

また、週末は、少し贅沢な外食をすることもあった。アパートの2軒隣に中庭のパティオ(patio)のある小さなレストランがあり、そこで「チャンカ・デ・ポーリョ(chanca de pollo)(1皿で20Bs=124円、2001年)」という僕の中で一番美味しいと思うボリビア料理を食していた。このスープは、鶏肉や空豆やクミンなどを食材にして、さっぱりとした味わいの中にも素材の豊かさを感じさせる。疲れた体を癒してく

れるような、心が和む味であった。 現在、生活を送る東京の片田舎の畑で6月 に採れた有機農法の空豆や生ニンニクで、 久々にこのスープを調理してみたので、レ シピを紹介したい。

<チャンカ・デ・ポーリョ レシピ> (材料)

- ・鳥もも肉 4枚 (手羽元でもOK)
- ・空豆 1カップ (グリーンピースでもOK)
- ・ニンニク 4片
- ・ジャガイモ大 4個
- ・長ネギの緑色の部分 3本分
- ・水 2カップ
- ・クミン(comino:セリの一種) 小さじ2
- ・塩 小さじ2
- ・コショウ 少々(調理方法)

1.鍋に水、塩、コショウ、クミン、ニンニクを入れ、一口大に切った鶏肉を柔らかくなるまで、約30分煮る。

2.別の鍋でジャガイモを柔らかくなるまで 茹で熱いうちに皮を剥いて一口大に切る。 3.同じく別の鍋で薄皮を剥いた空豆を柔ら かくなるまで茹でる。

4.鶏肉を茹でた鍋に、茹でたジャガイモと空豆、長ネギの緑色の部分を入れ、5分程度、さらに煮る。

5.最後に味見をして、薄ければ、塩で味を調整して、完成。

このアパートで約3年間生活をして、チャンカ・デ・ポーリョなど美食を味わえる コチャバンバ県の食のバラエティを知り、 この地の面白さを感じ始めたのであった。



写真1-2 6月に採れる野菜を生かした チャンカ・デ・ポーリョ

◆コチ・バケリーヤ(Kochi vaqueria)村 の住まいと美食~学び舎3棟目にて~

次の住まいは、標高3.800mの高山に位置 するコチ・バケリーヤ村。そこで、学び舎 3棟目建設のために都市コチャバンバと この村を往復する生活をしていた。この村 に向かうには、まず初めにコチャバンバ市 内から、運賃12BS(約186円、2003年)を支 払い、公共トラックの荷台に民族衣装に身 を包んだケチュア族の先住民、時にはチチ ャや家畜の豚と一緒に乗り込む。そして、 コチャバンバの中心市街地から約6時間、 このトラックの荷台で肌を鋭く刺すよう なアンデスの乾いた風を感じながら揺ら れ、アルケ川(Rio Arque)沿いのヴェンティ ーリャ村でトラックから降りた。最後に、 つぶらな瞳が印象的なリャマ(llama) (ラク ダ科の1種)などの家畜の動物を横目に、 標高3.500mを超える心臓破りの山道を徒 歩で2時間、人の心に焼き付くような色の テラコッタ色の赤土の上を登ると、この村 に到着する。

この村で借りていた住まいの広さは、約14.7㎡で、天井高は、小屋組現しということもあり、約4mであった。

住まいの構造は、壁厚400mmのタピアール(tapial)と呼ばれる伝統的な土壁構法の版築壁と、標高の低い所などから持ってきたユーカリ丸太を小割りした角材で組み上げたAフレームと呼ばれる小屋組み。住まいの仕上げの床は土間、壁は荒土壁、天井は枝と小屋近郊で採取したイチュ(ichu)という草。構造体も仕上げも、地元で採れた自然素材を中心とした住まいであった。

しかし、こうした住まいの部屋には、電気も電話も水道もなく、時には光を求めて月の明かりを頼りにするなど、現代の生活とは一味違う原始的な山小屋で、そこで、約8ヶ月間、生活をしていた。

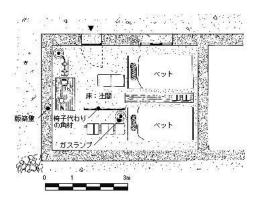


図1-2 コチ・バケリーヤ村の部屋の平面図



写真1-3 コチ・バケリーヤ村の版築壁と子供たち

そうした村での食生活は、コチャバンバ の街から食材を担いて登り、自炊をして いた。時折、近隣の先住民が飼育する貴 重なクリオーリョ(criollo)と呼ぶ放し飼 いの鶏と新鮮な卵で、親子丼を作ってい た。その鶏肉は、今まで一度も体験した ことのない弾力と旨味が凝縮された味わ いで歓喜した。また、時には村を離れた 調査先で、ジャガイモや保存食の乾燥芋 のチューニョ (chuño) をご馳走になる こともあった。それ以外にも、羊乳から 作ったメロンパンのような形をして爽や かな風味のチーズ、裏山で採れたビスカ ーチャというウサギに似た山岳地帯に生 息する動物の濃厚な味わいの肉、庭先で 採蜜した甘い蜂蜜を持ってきてくれた。 それらは人生の中で一度も味わったこと のない、滋味豊かな味わいで思い出深い。

こうした食生活をしながら、学び舎3棟目の建設を終えて都市コチャバンバへと引っ越した。この村での生活の中で、ティキパヤ村と違う新しい食材に出会い、心から感動して、2ヶ所目の生活を終えた。

◆都市コチャバンバ市内の住まいと美食 ~12000個の日干し煉瓦生産管理にて~

最後の3ヶ所目の住まいは、日干し煉瓦造の2階建てのアパートの一室である。そのアパートは、セルカード(Cercado)と呼ばれるコチャバンバ市の街の外れに位置した国立サンシモン大学の真裏にあった。この住まいで生活を送りながら、日干し煉瓦12000個の生産管理や、ラテンの国らしい斬新な色彩を操る画家ママニ・ママ

二氏の住まいの基本設計などの仕事をしていた。そうした仕事をしていた住まいの広さは、約12.3㎡。 部屋の特徴は、西日を昼間浴びた土壁が熱を蓄える点である。そして、外気温が低く寒い夜でもその土壁から熱が放出されて、室内は快適な温度環境であった。こうした肌で感じた土の住まいの良さは、今も身体に染み付いている。

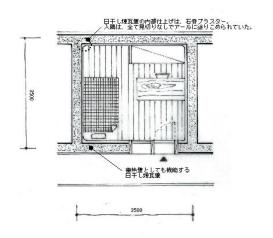


図1-3 日干し煉瓦造のアパートの1室の平面図

食生活は、自炊が中心であったが、中南 米料理やスクレ地方の郷土料理など様々 なレストランが街中にあり、時折する外 食も生活の楽しみであった。それらのど このレストランのテーブルにも「ヤファ (llajua)」と呼ばれる唐辛子ソースが並ん でいたことが忘れられない。ロコトとい う唐辛子やキルキーニャというハーブな どを用いた少し辛いソースで、美味しく、 一度食べるとクセになる味わいであった。 また、セルカードで生活している人は、 朝と夜の1日2食のことが多い。僕も、 このアパートに住む頃は、そのような食 習慣になっていた。しかし、仕事で疲れ た夜には、お腹が空くこともあった。そ うした時に、アパートの近隣にハンバー



写真1-4 唐辛子ソース「ヤファ」

ガーや、ピーナッツが入った唐辛子ソースと一緒に食すアンティクーチョ(anticucho)と呼ばれる牛の心臓の串焼きの 屋台が現れ、足繁く通った。どちらも炭 火の香りがして心が満たされる風味で贅 沢な食の体験であったとつくづく感じる。

◆土とともに生きる人々

東京で借りている畑も、まもなくジャガイモの収穫の6月下旬を迎える。毎年、この時期になるとコチャバンバの3つの住まいや、大地の上にアワヨと呼ばれる風呂敷を広げて休憩時間に食べたジャガイモを思い出す。そのジャガイモは、パパ・ナティーバと呼ばれるアンデス原産の何百種類にも及ぶ伝統野菜であったかもしれない。現在、農業を仕事にしていることもあり、いつか、そうした古来より栽培され続けているジャガイモを生み出す大地で、人間の原初的な素朴な暮らしを送っているコチヤバンバの美食を追い求め、再び訪れたいと思っている。 (つづく)

以上は、雑誌『月刊さかん』などに寄稿した記事を改稿した文章、新しく書き下ろした文章やボリビアでの仕事や旅で見聞したエッセイなどをまとめた自費出版『チャスキ ~ボリビア 土の建築奔走記~』2021 より内容を抜粋・改編したものです。

2. ベニ・パンド日本人移住地探訪記

(3) サンタ・ロサ・デ・アブナ 前ボリビア日系協会連合会事務局長 佐藤 信壽

2021年11月30日(火曜日)

21:30 発のフロータ (flota) (長距離バス) でリベラルタ (Riberalta) からサンタ・ロサ・デ・ヤクマ (Santa Rosa de Yacuma) に向かう。(バスは予定より 1 時間半の遅れてある)

12月1日 (水曜日)

11:30 にサンタ・ロサ・デ・ヤクマでオオタ・ファミリーに前回借りた資料を返し、テルミナルでルレナバケ行きのトゥルフィ(trufi)(乗り合いタクシー)の出発を待ち、15:00 に出発となり、18:00 にルレナバケに着く。タクシ(Tacsi) 会長に前回借りた資料を返し、今後の資料収集への協力を依頼する。サン・ホセのセノン・リマコからルレナバケに来ているとの連絡があったので、明日ホテルに来てもらい面談することにした。

12月3日(金曜日)

10:00 にテルミナルに行き 11:00 にラパス (La Paz) から来たフロッタ・ユンゲーニャでコビハ (Cobija) に向かう。

12月4日(土曜日)

15:30 にコビハに着く。もう雨期に入っているので道路事情が悪くなり始めていて時間がかかる。

12月5日(日曜日)

ペルー、ブラジル、ボリビアの3国の国 境地点であるボルペブラ (Bolpebra) に 行く。道路わきは切り開かれて牧場となっているが、その奥の原始林を見ながら「1918年に新垣庸英たちは、あのような原始林の中をこのコースを辿ったのか」と思うと眠気も覚める。12:00少し前にボルペブラに着く。しかし、隣国への自動車道路はなく、辺鄙な田舎町でしかなかった。川を挟んだペルーやブラジル側の町はそれなりの町である。コビハに戻ってから日系人会役員の一人と会う。



写真 2-1 公園前のバス発着所とホテル 12月6日 (月曜日)

ポルベニル (Porvenir) の日系人会長が コビハに来ているというので面談する。

12月7日 (火曜日)

いよいよサンタ・ロサ・デ・アブナへの 出発である。「トランス・ビオセアニカ」 というバス会社の便があり、11:00 に出 発予定で11:30 の出発となった。

サンタ・ロサ・デ・アブナは、サンタ・ロサ・デ・ヤクマのオオタ・ファミリーの初代になる建築家の太田為一という日本人が最初にボリビアに入った所だと聞いたことと、サン・ホセのセノン・リマコの叔父だろうという人が住んでいたことがあるとの町だった。初期の日本人移住者がゴム採取をしたバラッカがあった

のかも知れないと思ったが、カチュエラ・エスペランサ(Cachuela Esperanza)に居住するニコラス・スワレス(Nicolas Suarez)のひ孫になるという方からは「アブナ地域は、野蛮な先住民が居住していたので、バラッカ(barracca)が作られてゴム採集を始めたのは遅かった」とも聞いたので、行ってみようと思ったのである。

途中の道路でトレーラーが停車していたり、坂道でスリップしてその対処をしたりしていたので到着は23:00となった。バスの運転手から、「ホテルが開かなかったらこのバスの座席で寝ても構わない」と言われたが、ホテルはすぐに開いたのでホテルで宿泊をする。照明のスイッチが部屋にはあったが通路やトイレなどには見当たらなかったので母屋にあるだけかと思った。

12月8日 (水曜日)

翌朝は、昨日乗ってきたバスがコビハに 戻るために始動したエンジンの音で 05:30 に目覚める。

この日は、サンタ・ロサ・デ・アブナに 滞在することにして、06:00 頃から 1 時間ぐらい散策する。ホテルから 15m くらいのところにアブナ川が流れていて、橋もあり、その橋の下は港(名前だけだが)となっている。コーヒーとエンパナダで朝食をしながら、その店の人に話を聞くと、「数年前に 100 家族ぐらいが移住してきたが、今は半数ぐらいしか残っていないのではないだろうか」とのことであった。また「この川筋はあまり開発さ



写真 2-2 アブナ川

れていないので、半未開の人々もいるらしい」とのことであった。橋の向こうは、道は少し悪いが、ブラジルの「プラシードデ・カストロ(Placido de Castro)」の町まで繋がっていて、その国境には密輸の町として作られたと言われる「プエルト・エボ・モラレス(Puerto Evo Morales)の町があるとのことである。

この町にも日系人は、10家族ぐらいいるようなので、今回の調査について何人かの人に話したが、町の人たちは、日系人がいることを知らないようなので、日系人の日系意識はないものと思われた。

この町は、朝聞いたように入植した半数近くが出て行っているとのことで、空き家が多く、宿泊したホテルも「数年前に増築し、バス付の部屋も作ったが、泊まるような人も来ないので、無駄な経費だった。自分はボリビア人だが妻はブラジル人で、サンパウロにも家があるので、来年はブラジルに戻ろうかとも考えている」とのことであった。また、テレビやラジオ放送なども、ポルトガル語なので、ブラジル圏にいることを感じた。

夕方ホテルに「トクドメ」という日系

4世が子供を連れて訪ねて来て、「自分は 親や祖父母から日系だと聞いたことがあ るが、その日本人の歴史は知らない。こ の子供たちにも日本と繋がることを教え たいが自分にはできないのでどうしたら いいだろうか」と語った。

私は、今回の調査の目的を話し、来年4月ぐらいには「ボリビア日系協会連合会」のWebページに「ベニ・パンドの日系人の歴史」が掲載される予定であることを話し、自分の今回の活動の意義を改めて感じた。

この話の後で、今日着いたバスの運転 手も話に加わり「私もポルベニルの日系 人でカナザワという姓であり、妻はオオ シロという日系人だ」と言ったので、表 面には出ていないが日系の意識はそれな りに持っているのかとも思った。

06:00 にカナザワの運転するバスで

12月9日 (木曜日)

13:30 にコビハに戻った。他の地区にも行きたいとおもったが、雨期の道路事情の悪さを考えリベラルタへ戻ることにした。テルミナルに行き翌日のリベラルタ行きのチケットの予約をしようとしたら、「外国人は警察の許可がなければならないので、警察詰め所まで行ってほしい」というので、行っても構わないが警察官がいなかったら「どうするのだ」と話していたら、他のバス会社で仕事をしている日系人で、以前リベラルタで会ったことのある人が「この人は日本人でボリビアの永住権も持っていて、身分証明書も正規のものであり、警察の証明などは必

要のない人だ」と保証してくれて問題な くチケットを購入できた。日系のつなが りの便利さも感じた。

そういえば、今回コビハに来て、ホテルにチェックインした時も「外国人は宿泊させられない」と断られた時に、たまたまそこいいた人が「この人は日本人なのだから問題はない。日本人を宿泊させない理由は何があるのか」と抗議してくれて、問題なく宿泊できた。日本人への信頼を築いてくれた先人への感謝の思いを感じた。

12月10日(金曜日)

13:00 にコビハを出発し、翌日 12 月 11 日 (土曜日) の 02:30 にリベラルタに帰着。乾期には 8 時間ほどで到着するのだが、もう雨期になって道路事情が悪かっため 13 時間半も掛かってしまった。

(つづく)



図2-1 パンド県の首都・コビハとサンタ・ロサ・ デ・アブナの位置関係



図2-2 サンタ・ロサ・デ・アブナとプラシド・デ・カストロの位置関係



図2-3 プラシド・デ・カストロとプエルト・エボ・モラレスの拡大図

3. ボリビア・サンタクルスの秋 前ボリビア日系協会連合会事務局長 佐藤 信壽

2022年5月、ボリビアの新聞には、ロシアのウクライナ侵攻や新型コロナウイルスの感染者、道路封鎖、密輸などのニュースが掲載されていて、社会面では気が重くなることが多いですね。

しかし、自然は、そのような人間社会 とは関わりなく例年のように花の季節と なっています。一日、カメラを持って町 を散歩しました。小さな公園の中にも、 ピンクと白のトボロッチが咲き誇ってい ます。



写真 3-1 トポロッチの花



写真3-2 白いトポロッチの花



写真3-3 アレナル映画館とヤシの木とトポロッチ アレナル公園のベンチから旧「アレナル映画館」を背景にヤシの木とトポロッチが見えます。中央公園に行くと、カテドラルの前幕の様に花が咲いていました。



写真3-4 中央公園



写真 3-5 ヤシの木にエアープラントが小さな花を つけていました。

都市公園 (パルケ・ウルバノ) では、 座ったベンチの前のマンゴーの木に花と 速成の実がついていました。また、棚に はブーゲンビリアなども咲いていました。 サッカー場の横の通りの中央分離地は、 トボロッチの並木になっています。



写真3-6 ブーゲンビリア



写真3-7トポロッチの並木道

日本では、春の花曇りに見る桜の朧な 美しさや、粉雪の様に舞う花吹雪も一興 ですが、ここサンタクルスでは、秋の快 晴に色鮮やかに花が個性を主張している のは、南米ならではのように感じます。 また、花の下のベンチに座っていると、 風にふかれて散ってくる花は重みがあり、 体に当たるとたたかれているように感じ る位です。花と言っても、その国や地域 で感じ方や趣が違うものですね。

(終わり)

4. 日本人が見たリベラルタ ーその10-

財団職員 明治大学島嶼文化研究所客員研究員 大島正裕

1. 野田良治『南米の核心に奮闘せる同胞を訪ねて』

日本の戦前の中南米を専門とした外交官の中で、最も有名で、よく登場する人物が、野田良治(1875~1968年)である。野田は、1875(明治8)年京都の生まれで、東京専門学校(現早稲田大学)を卒業して、1897(明治30)年外務省に入った。フィリピン、メキシコ、ペルー、チリの領事館、公使館で勤務し、1909(明治42)年よりブラジルに転じ、1934(昭和9)年帰国し、外務省を辞職。晩年は『日葡辞典』を編纂する等著述にも尽力した」。著作も多く、『ブラジル人国記一実査十八年』、『大アマゾニア』、『らてん・あめりか叢説』『南米の核心に奪闘せる同胞を訪ね

『大アマゾニア』、『らてん・あめりか叢説』、『南米の核心に奮闘せる同胞を訪ねて』等がある。この著作のラインアップを見てもわかる通り、日本における中南米研究のパイオニアでもあり、その蔵書は神戸大学に寄贈されている²。



写真3-1 野田良治

「野田」というのは、彼が養子に入って からの苗字で元々は「今村」良治といい、 中南米での最初期の仕事は、1899年に開始 された日本からペルーへの移民事業での トラブルシューティングだった。この移民 事業を主導した移民会社(森岡商会)の田 中貞吉とは、ライバルのように扱われるこ ともしばしばであり、1899年以降続いた日 本人移民の苦難の状況を本省へ公電で書 き送ったのが野田であった。また、1899年 の第1回移民790名のうち、91名が日本政府 の事前許可なく、田中の判断で、ボリビア のラパス県北部にゴム林契約者として移 動させられた事件(最初のボリビアへの移 民) の調査報告をまとめたのが、野田であ り、その報告書も伊藤一男が指摘するとお り「格調高く、短い言葉の端々には火を吐 くような気迫があふれて」いた4。

前半生は、スペイン語圏で活躍したが⁵、 ブラジルに移ってからは、ポルトガル圏に 長くいたせいか、後年は『日葡辞典』編纂 等ポルトガル語の専門家として評価され ている。ただ、野田についての伝記的な研 究は乏しいようで今後の研究が待たれる。

ところで、この野田がブラジルのベレン (Belém) に滞在中、同機会を利用してアマゾン地域を周遊した記録が、1931年に公刊された『南米の核心に奮闘せる同胞を訪ねて』である。これは、アマゾン地域を地政学的に位置づけたユニークな著書であると共に、彼のいう「奥アマゾン」に点在した日本人を訪ねた貴重な記録となっている(興味のある読者は、「日本人が見たリベラルタ その1」に掲載した野田作成

の地図を是非ともご覧いただきたい)。

野田は、「南米の核心」について、「そ の大部分はボリビア国に属し、同国領アマ ゾニヤの全部を包容し、それに ペルー領 アマゾニヤの一部たるマドレ・デ・ディヨ ス県の全部と、クスコ県の一部を合わせ、 更 にブラジル領アマゾニヤの内マトグロ ッソ州の西北部をも加へたものである」 (同書p.77) と「核心」の大部分をボリビ アが占めていると述べており、その「核 心」に浸透しつつある「同胞」へのエール が本書の趣旨である。この書の後半では、 各地の日本人訪問記録が詳細に記載され ているが、リベラルタについてもかなり詳 細な記録を残している。本稿では、野田の 記録に沿いながら、1930年代初頭のリベラ ルタの状況を素描したい。

2. ニコラス・スアレス表敬

1930 (昭和5) 年12月初め、野田は、ブラジルとボリビア国境のグアヤラメリン (Guayaramerín) 経由で、ボリビア領内に入った。更にそこから自動車で、スアレス商会の本拠地カチュエラ・エスペランサ (Cachuela Esperanza) に向かった。そこには、リベラルタ日本人会の重鎮達が出迎えのためやってきていた。リベラルタ日本人協会の副会長丹治一郎、幹事比嘉良儀、医師の藤井虎雄、石井七三、谷佐五郎に加え、カチュエラ・エスペランサの歯科医清野五郎、これ以外にもビリャベリャ(Villa Bella) 在住の邦人4人もいた。一旦、ビリャベリャに向かった後、ゴム産業で巨万の富を築いたスアレス一族の拠点カチュエ

ラ・エスペランサに戻り、野田は、スアレス家経営のホテルに滞在したが、そのホテルは、日本人上野勝二に任されていた。近隣で最も豪華なホテルで、また料理人にも日本人が2~3人おり、その中のひとりは野田が以前の任地で会った旧知の平田謙治であった。野田が到着した日は、このホテルで盛大な宴があり、スアレス商会で経理を担当している重国忠治も参加した。この頃、カチュエラ・エスペランサには合計で9人の日本人が働いていたようである8。

さて、野田は、重国忠治を通じて、スア レス家の総帥ニコラス・スアレス(Nicolás Suárez Callaú, 1851-1940)への表敬を申 し込んだところ、12月6日にニコラスに会 談する機会を得た。野田はニコラスを「白 髪白髭」、「風采態度言語対応まで、実に 立派な老紳士 | と書きつけている。野田が スアレスに挨拶したかった最大の理由は、 このスアレス家の事業に多くの日本人が 関わっていたことであろう。スアレス家所 有のゴム林、スアレス商会系列のホテルや 食堂、更には重国のようにスアレス商会の 管理部門で働く者等、多数の邦人がスアレ スの事業の恩恵に属していて、そのお陰で 日本人は、南米の「核心」で生きてこられ た。 野田は「日本人として衷心より深謝 すると同時に、願わくは今後も日本人の庇 護者、援助者、同情者、親友として、これ まで通り御世話を願う」と述べ、これに対 してスアレスは、「自分は日本人の勤勉怜 悧かつ正直なるを認めて、大に感服し、彼 等に多大の同情を寄せ居る者である。実を いへば自分が日本人の利益となったと同

様に、彼等も亦自分の為に極めて有益なる 要素であった。言はるるまでもなく、自分 は今後といへども出来るだけ、そして欣ん で日本人の力となる積りであると挨拶し

た。」(299-300頁)



写真3-2 スアレスと日本人⁹ 後列端に日本人が見える

3. リベラルタへ

1930年12月7日、汽船トリウンフォ

(Triunfo)号にて野田はリベラルタに入った。船着き場に多数の日本人が野田の到着を待ちわびていた。リベラルタ日本人協会会長の下瀬甚吉(「日本人が見たリベラルタ その5」参照)も、(リベラルタの属する)バカディエス(Vaca Díez)郡の郡長も来ていたようだ。更に同地の軍隊司令官等も来ており、野田は、今回の旅は決して公務でなかったが、ボリビア側は、日本人外交官の到着に大いに敬意を払った対応をしてくれた。

野田は、その鋭い観察眼で、とりとめの ない風景の中にリベラルタの街並みの特 徴を捉え、以下のように記述している。

「町内の家屋は商店たるとを問はず、街路に密着して建てられ、幅1m乃至2mの軒下が歩道として利用される。そして街路一面に密生せる雑草の掃除役を兼ねて、そこに放牧されている所の牛が、その歩道を横切り、家の中へ訪問して来るのを防ぐために

街路と歩道との間に柵が設けられ、角々には人間だけが一人づつ通行出来て、しかも家畜は出入が出来ぬように、ぶん廻し式または屈折式の出入口が設けてある。辻々には『口(くち)』の字形に厚板などを布いて、舗装なき街路を横切るようにしてある。なお外側なる歩道と屋内の床とは大抵同じ高さである。」(313-314頁)

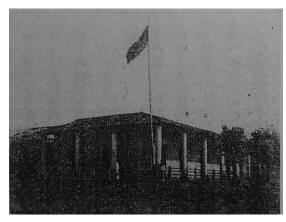


写真3-3 歩道のイメージ[®] 「リベラルタ町の一邸宅 柵の内部は公衆用歩道」とある

当時のリベラルタは、ゴム産業が斜陽に 入ったこともあり、必ずしも一時期のよう な活況を呈していたわけではない。日本と ボリビアが外交関係を樹立した1914年頃 には、リベラルタの日本人は400名、更に 町の上流や下流の1~2里の間に日本人の チャコ (chaco: 農園) が散在し、更にゴ ム採取のためにゴム林に入っていた日本 人をあわせるとリベラルタ市とその近郊 に800名以上がいたのではと野田は推測し ているが、第一次世界大戦の勃発や東南ア ジアのゴム・プランテーションの勃興によ りアマゾン地域のゴム産業は追い込まれ、 この結果、貯金を携えて帰国した者や他地 域に移動した者が続出し、1920年の第1回 国勢調査では397名に減じていた。丁度、

野田が訪問していた際にリベラルタ日本 人協会で調査した結果は、リベラルタ市及 びその近郊に在留する日本人は、男性163 名、女性6名、合計169名となっていた(3 19-320頁)。

このように寂しい状況となりながらも 残った日本人は多種多様な職業に進出し ていた。輸入貿易に従事する株式会社太陽 商会、21軒の日用雑貨小売店、精米所、パン、麺類、ソーダ水、石鹸等の製造所、裁 縫師、大工などの手工場、理髪店もある。 更に近郊には野菜園経営者56名、これ以外 にも焼酎醸造、木挽業、漁業等多種多様な 職業で活躍していた。

4. 野田の見たリベラルタにおける日本人達

12月11日、野田は、下瀬リベラルタ日本 人協会会長、藤井医師と共に日本人経営の 精米所を視察した。精米所を立ち上げたの は、以前にも紹介した沖縄出身の元軍人上 原松四郎(「日本人が見たリベラルターそ の6|参照)をはじめ、竹迫甚四郎、石井 七三、比嘉良儀の4人で、このうち機械に 明るい石井が、「ある古汽船から得た部分 品に、相当の修補を加えたるうえ組みたて たものの由で、昭和3年〔1928年〕6月に創 立せされ、1日約3トン半の精米能力が有 る」(322頁)。ただ、それまでリベラル タに全く精米所がなかったわけではなく、 スイスのセーレル商会の精米所があった が、上原達の精米所の登場に危機感を覚え 値下げを敢行した。しかし、上原達は、こ の競争に乗らず価格を維持し、良質な精米 作りでなかなか儲かったという。

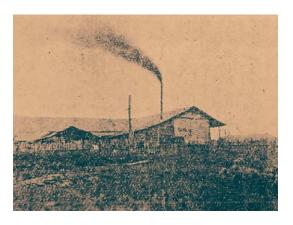


写真3-4 精米所11

精米所訪問から帰り、野田が日本人協会 を訪問したところ、協会は近隣の日本人達 に幅広く声をかけていたようで120人の日 本人が集まってきた。そこで、日本人協会 名義で所有する一家屋で宴が催された。野 田はここで挨拶を求められ、更に日本人協 会から請われて、「リベラルタに就ての感 想と在留同胞に対する希望」という訓話を 書いて渡した。筆まめな彼は全文を転写し ている。長いので割愛するが、野田の要約 を借りると、リベラルタの邦人の心得とし て3か条を提示した。それは①永住の覚悟 を決めること、②一層衛生保健に留意する こと、そして③子女の教育を決して忽〔ゆ るがせ:おろそかにの意味〕にすべかざる こと、一生を南米における日本人発展のた めに尽くした野田らしい同胞への激励で あるといえよう。

さて、現在、リベラルタの町における日本人の生活や日本人協会内での議論については、断片的に残された日本人協会の議事録等からおおよそは読み解けるのだが、リベラルタの町の近郊、川沿いに広がって

いた日本人の農園 (チャコ) については不 明なことが多い。野田はチャコを訪問し、 その状況を描写している。野田によると、 野菜園経営者10名、農場経営者56名、あわ せてチャコ経営者が66名という。「町より 上流に於けるベニ河の両岸、同じくマドレ ・デ・ディオス河の左岸、町より下流のベ ニ河の右岸等に散在し、アンテノール島に も亦一箇所ある」(341頁)。但し、各農 園を経営しているとはいえ、大抵は借地農 で、 開墾してから3年間は 「新地」とし て、4年目からは「古地」として借地料は 少しずつ減じられる。スアレス家所有地で は、3年間借地料を払えば、その後は無料 という寛大さだったようだが、日本人は、 蓄財後は帰国するのが普通であり、永住を 決意しない。野田はそうした同胞が土地を 購入し、永住を決意し、日本の国威を発揮 するのが望ましいと戦前の外交官らしく 考えていたようだ。

以上のように野田は、居住する日本人達と接しつつ、丹念に観察記録を書き残しており、結果的に本書は、当時のリベラルタを知るための一級の資料となっている。

(つづく)

なお、野田の前半生については、大島正「『船舶すみれ』の成立」『同志社大学人文学会』 54号、1961年、94-108頁参照(以下、URLから閲覧可能)

file:///C:/Users/24981/AppData/Local/Temp/MicrosoftEdgeDownloads/11b74fbf-1015-4723-8328-daae6f84dd26/j05407%20(1).pdf ³伊藤一男『明治海外ニッポン人』、135 頁

¹ 伊藤一男『明治海外ニッポン人』(PMC 出版、1984 年)、134-135 頁。

https://www.rieb.kobe-u.ac.jp/project/latin-a merica/library-j.html

4伊藤一男『明治海外ニッポン人』、135 頁 5 太田宏人の研究によると、野田は、1911 年南米最古の日本語雑誌「而立」の創刊に携わっている(太田宏人『110 年のアルバム~日本人ペルー移住 110 周年記念誌~』(現代史料出版、2009 年、52 頁。1899 年の第 1 回移民から 10 年ちょっとしか経ていない中で、なぜ『論語』の「三十にして立つ」を標題にしたのかは分からないが、日本人移民の「自立」をかけているように思える。

6野田良治『南米の核心に奮闘せる同胞を訪ねて』、博文館、1931年(なお、本稿では、『日本移民資料集 南米編 第20巻〈昭和戦前期編〉、日本図書センター、1999年を使用した』。なお、以降、出典を記載していないものは本書からの引用。

- 7 以降、引用箇所については、原文の旧字は常用漢字に改めた。
- 8 マルタ・シゲクニ氏の手記によると、カチュエラ・エスペランサには31名の日本人のリストが記録されている (Shigekuni

Cáceres, Martha, *Breve reseña historica de la inmigración japonesa a Bolivia*, 1999)。 なお、同氏は先日ご逝去された。同氏とは、ボリビア勤務時にお会いし、色々とお話を聞かせていただいたことを思い出す。ここにご 冥福をお祈りします。

- ⁹ Shigekuni, *Breve reseña historica de la inmigración japonesa a Bolivia* ¹⁰野田、338 頁
- 11 野田、323 頁

編集委員

椿 秀洋 杉浦 篤 細萱 惠子

◎日本ボリビア協会維持会員一覧◎









Copyright© 2002-2022

一般社団法人日本ボリビア協会 ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA

All rights Reserved

(本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています)